

ですが、第一の苦労は、食糧の絶対量の不足です。粥食一食分で一日を過ごさなければならず、労働の下請け、農家の手伝い等、喰い伸ばしに必死でした。

つぎに良民がときたま暴走族に化すことです。武器なき兵隊こそあわれです。黙って、取られるのを見るのみです。

やっと引揚げの日程がきまりホッとしました。上海―博多―東京へと帰国し、東京から家族の疎開先の前橋まで探し求め、涙の対面です。しばらくして東京の焼跡へ立ち戻り、掘立小屋を建て、見よう見真似で靴の修理を始めました。

一年ほど経ち原料の仕入れも分かり始めたので個人靴の注文販売を始めました。婦人靴の、特にダンス靴の販売が当たりホッとしました。

カメラは材料不足でしばらくは手も足も出ませんでした。

落ち着いてから結婚し、現在、一男二女に恵ま

れ、それぞれ世帯を持ち元気で生活しております。

冒頭、申し上げたように郷土部隊でなかったため、戦友会は結成できず、開催もなく淋しく思う日もあります。

二度と戦争の無いように家族ともども語りあっています。

戦争と自分

過ぎた時間は二度と来ない(一)

佐賀県 中島 富夫

私は、陶器市で有名な佐賀県有田町で、陶器製造をしている家に生まれ、昭和十一(一九三六)年六月十日、小学校五年生の時「時の記念日」の標語の募集があり『過ぎた時間は二度と来ない』と題して応募、佐賀県教育委員会より表彰を受けた。

忘れもしない翌年五月八日、陶器市が済んだ日に、近所の子供の火遊びが原因で家が全焼した。四男一女の子沢山の父は大変な苦勞であったという。そのため私は、鍼灸師の叔父の家の見習弟子として修業を続けることになった。いくら叔父・甥の間柄でも修業と徒弟としてのことは特に厳しい日々であり、夜逃げ同様にして叔父の家を飛び出したこともありました。

昭和十二年九月十日頃、父が突然叔父宅に現われた。私は「父が私を迎えに来てくれたか、やっぱり親だ」と思う間もなく、先生である叔父は大声で「よく聞け、お前の父親は戦争に行く召集令状が来たのだ、逃げたり隠れたりしないで、ここで頑張りますと誓え！」私はしばらく黙っていたが「ハイ、やります！」とやっと言葉が出た。これで万事休す。私の一生は決まってしまったのだ。

父は数日後、久留米の野砲隊（第十二師団）に入隊して、十一月五日、杭州湾敵前上陸戦に参

加、一路南京に向かつての進撃でありました。転校した小学校二年二組の田中善次郎先生は、教室の後の黒板に大陸の地図を貼って、日本軍の占領地に小さい日の丸の旗を立てて、その月日の記入を私にさせました。

叔父である鍼灸の先生は、学校の成績が良ければ上級校へ進学させる望みがあるのかな、と暇を見付けては勉強をした。二期期には国語の「諸葛孔明の詩」を全部暗記ができたので、六年二組の教室で、また帰っては叔父宅の皆の前で暗唱をしてみせました。他の学科もすべて上位であり、さらに頑張り、戦地の父に負けまいと思っていた。しかし、叔父はこれを認めず、師範学校進学も許されませんでした。この世に神仏はいないのか、涙も出ません。じつと我慢を重ねていました。

篤農家の一人息子の関君とは、絵画の展覧会で、私が天賞、関君が人賞で入賞、その後二人は仲良くなり、学校帰りには関君宅で親切にされ、食事等で私の栄養源となり、心身共に世話になり

ました。

私は父が「中支戦線で活躍中」との軍事郵便を見て、部隊長浅野中佐殿に手紙を書きました。

「私は六年生です。銃後の小国民として毎日頑張っています。父中島松次をよろしく、一日も早い凱旋を待っています」というように書いたことを記憶している。その後、浅野部隊長殿より返事が来て「君の父上中島松次は元気で軍務に服している、銃後の守りは君達にたのむ」と書いてあり、高等科二年の卒業までは帰ってくれることを、ひたすら願っていた。少し遅れるが、まだまだ進学の夢を持ち続けていたのである。

昭和十五年の五月、海南島警備を最後に父は召集解除となり、無事帰郷しました。私の期待と裏腹にそのまま「引き続き徒弟生活継続せよ」と言われ、余儀なく続けざるを得ず、最後の希望も絶たれてしまった。

これから本格的な四年修業に取り組んだ。何人

もの人が弟子見習に來ては三カ月で帰る人があり、また一年余り修業していたが、中断して帰る者、何人もの退去者をこの眼で見ている私は、自分分は辛抱できるか？ と、自問自答の毎日であった。

患者さんは朝早くから多く、夜十二時まで普通である。松下鍼灸院の看板を「時局療院」と書き変えて「出征家族には半額、六十五歳以上の方は敬老券発行」としたため連日大忙、叔父に代わって往診に出かけることも多くなる。早目に終わって帰る途中、帳面に書いた解答集のメモを取り出し、外で三十分位暗記して帰宅していた。叔父である先生は、私をいつまでも使用人として止めおき、早い試験合格を嫌うのである。

いよいよ戦争は激しくなり、軍需品大生産のため昭和十七年十月二十五日、第九次国民徴用令状が来た。叔父は怒り、各村長を尋ね令状の撤回を求めた。しかし何の役にも立たなかった。私は、

海軍軍属として、佐世保海軍工廠造兵部水雷科に入廠した。当日直ちに佐世保市山之田の工員宿舎に入り、作文と口頭試問があり、海軍軍属二等企画工員を命ぜられた。

昭和十七年十二月初め、魚雷専門の佐世保海軍工廠川棚分工場の作業係として転出した。東洋一の魚雷工場の配置図、第一工場より第三機械仕上工場、精密工場、鑄造工場、部品倉庫、本部事務所、守衛室、医務室、炊事室の位置詳細図面、九一式空中水雷の極秘図面一切と、保管倉鍵全部を私に一任され、上司は海軍部員殿（海軍技術将校）で、海軍中尉か少尉の方ばかりで、普通工員は私一人であった。

仕事は図面の貸出（約三千部品）と、収納の間と氏名（組長以上）を記載して、作業命令券発行、艦政本部よりの指令電話の内容を記入し、直ちに上司に報告する。

昼夜連続の大生産であり、五時間、六時間残業は全員誰でもする。徹夜残業の場合二十四時勤

務。便所、食事が短時間許され、これが三日連続いたら体調もおかしくなる激務ぶり。一本の魚雷と二十人の工員の命と引換えだと噂されていた。

私は徹夜残業の時、毛布をかぶって十分か二十分の仮眠作業服のまままで直ぐ起こされる。責任ある仕事で一人のみの超勤務であった。遂に、昭和十八年九月、発熱悪寒、食欲なく受診しながら勤めていたが、肺結核と診断され入院。薬もなく転地療養となり、有田の実家に戻った。

有田町長林平次殿に相談したが適当な病院もなく、方面員（現民生委員）にお伺いしたら「近頃の若い者は気合が足りない」と言っただけならぬ。町の噂では、その頃、町にも医者や病院が無いので、九州大学より先生が時々来ておられる話を聞いた。

毎週日曜日に町の避病院に九大医学部楠内科より来ているとこのことを確かめ、早速受診したら「精密検査が必要である」と日時を決められたので九大に伺ってみた。何回か受診をし、結果を聞

き静養につとめていた。灸治療も試み、よもぎ団子を食べたりして早く体力をつけ回復して現役入隊を夢見ていた。

一方、戦況は日毎に悪化の傾向にあり、東條内閣は兵員補充のためか、現役一年繰上げ徴集を決定した。私は一級上の方々と一緒に徴兵検査をうけることとなった。昭和十九年四月、伊万里町で徴兵検査、病氣療養中で、体格等差は第二乙種合格となった。本来なら甲種合格であったと思ひ残念であった。養生中に鍼灸師試験に合格をしたので、兵科は衛生兵となり申告させられた。

咯血

知人、友人は毎日召集され出陣して行く。私も、一日も早く体力回復を願ひ養生につとめていた。八月二十五日、役場より現役入営の通知状が来た。「昭和十九年九月十日、久留米、西部第四十八部隊に入営せよ」と記入してあり、友人の有田町の水田保宅を訪問し挨拶をしての帰途、大き

な咳をした途端にパツと赤い血を吐いた。

八月二十八日十五時頃であった。続けて咳が出る。血が止まらない、恐れていた咯血だ。白いワイシャツが赤くなり、その場に坐り一時間位、静かに血の止まるのを待った。なるべく安静を心に誓い、天地の神々に「入隊まで、あと十四日間を生かして下さい」と秘かに祈った。いつしか、ワイシャツの血の赤は黒くなっていった。その間、誰一人通らず生死の境を往復していた私は、自然と血餅が出血を止めたのか、咳をこらえていたら血がでなくなつた。立上り顔を地面に向けたら、鼻より血塊がどろりと出た。

やつとこのことで家にたどり着いたら母が居て「誰と喧嘩したか」と激しく問うが答えられず、手を振って「紙と鉛筆」と何回書いても判らない。言葉を出せば出血するので、手で合図してやつと理解してくれた。

母は近所の松尾家の深井戸の水が冷たいと知つて、急ぎバケツ一杯戴いて来て、胸を冷してくれ

少し楽になった。その後も軽い咳でも鮮血が飛ぶ。ああ、俺は一体入隊できるだろうか、祖国存亡の危機なのに、あと一週間、五日間生きていたい。入隊前の三日、咳をおさえて安静にしていれば血が出なくなつた。病院にも行かず、薬一服も吞まず不思議にも安定してきた。日頃信仰の私が、神よ、仏よと、複雑な心境で入営の日を待った。

現役入営

九月九日、母は朝早く畑の甘藷サツマイモを掘つて来て、蒸してくれて「食べて行け」と小指程の甘藷を差し出してくれたので、口に入れたが、喉をやつと通りこした。母もこれが、生死の別れと決めていた。同郷の久部、相馬君と私ら三人は、多数の歓呼の声に見送られ出発した。

久留米市内の宿は明日の入隊者で満員だった。祖国の為「一死報国」を誓い同宿の人々と、一夜を仲良く語り合い、夜の更けるのも忘れ、なかなか寝付かれぬ夜であった。

翌十日朝、西部第八十四部隊の営庭は新入隊者の群で埋っていた。「聞け、伝染病地域から来た者は前へ出る」「私物はすぐ小包にまとめ宛名住所氏名を書いて一個所に集める」「全員駆足で身体検査場へ」「身上調書は直ぐ書け」「精密検査の必要な者集合」。血沈・レントゲン・喀痰検査の結果の出るまで集合させる。

さて、私を軍医殿が胸部聴診していて頭を傾けられたが「よし」と言ってくれた。これで帝国軍人になれた。祖国のため命は惜しくないと覚悟した。

衛生教育隊通修

直ちに第六中隊に編入。入口に「剣術優秀中隊」の看板が大きい、一カ月間執銃訓練、起居は本科（歩兵）と同内務班、厳しい指導の先輩が待っている。心配していた体調も次第に回復、神仏に感謝し、戦友達にも負けぬその気持ちも大きくふくらんだ。

第六中隊第五内務班は、歩兵・衛生兵の初年兵

が約二十人、古兵は兵長殿はじめ二十五人位、合計四十五人程であった。朝礼、点呼、銃剣術、朝食、食缶返納、掃除、銃剣手入れ、通修整列、つまり、早飯、早糞、早走り、他の者より一秒でも早い者が勝ちである。朝食当番が飯・汁をつぎ終わり、週番上等兵殿が「よし」と合図がなければ食器に手をふれられないし、盛付けの多いのを注目している。

そのすきに、雑巾七枚のうち一枚を素早く軍衣の下にかくしおき、合図と同時に飯に汁をかけ一気に呑み込んだ。直ちに廊下を駈け足で雑巾がけ、折り返している時、二番手が五班を出発している。私は、五班到着と同時に「よし、中島交替せよ」の掛け声で、ドロドロの雑巾を次の戦友に渡す。ホウキかバケツ、塵取り、何でも握っている者はよいが、手ぶらな者は古兵殿よりビンタが飛ぶ。

銃剣術の間、稽古も、木銃は充分あるが防具が七組だけで、防具取りの争奪戦はすさまじい。半

分防具を付けていると、古兵より直突き一本でひっくり返され、起き上がれない程痛い目に会う。

ちよつとでよいから足りない防具を貸してもらい、型の訓練をしなければならぬ。ゆつくり着ていると、一人も居なくなり整列点呼が始まっている。このような行動により、機敏で、困苦に耐える兵隊が仕上がっていく。軍隊へ入った殆どの者が体験するのである。

次に具体的に衛生教育、約三百人が受講した。毎日衛生教程通り、解剖・生理・病理・衛生学・救急法・看護法・担架演習・医療器具取扱・医薬品取扱・演習参加、講演、病室勤務等々、他部隊の者に負けないように他の中隊の者に遅れを取らぬよう他の者より一歩先に出ることがすべての、学科・実技とも競争は熾烈を極めた。今すぐに戦地に派遣されても衛生勤務ができるようにと、教官も熱心だった。成績は序列、進級に直接関係する、毎日が緊張の連続であった。

病理か、解剖の担当教官か、九大医学部楠内科の竹末先生で、私が結核の時、世話になった先生でした。まさに地獄で仏に会った気持ちである。

竹末教官は「君は鍼灸師の資格者だから助手として勤務せよ」と言われた。通修も三カ月経過し一期の検閲が来た。大半は一時帰休兵として帰郷した。

我々は各部隊の各中隊付衛生兵として分散勤務についた。私は入隊当時より一緒であった高祖君と同じ久留米西部第四百八十八部隊通信中隊付衛生兵として配属され、部隊付医務室勤務を命ぜられ、私は診断勤務となった。

昭和二十年一月十日、現役兵がこんなにいるかと思う程に奉公袋を下げて営庭に整然と並んでいる。早速初仕事、三千人位の入営者をさばき、各部隊の誘導兵に渡す。伝染病地域よりの入隊者は列外に、要精密検査の者、即日帰郷者の旅費支給は早く退去を、召集は出戦要員より多く集めてい

るため、即日帰郷者があっても編成に支障はない。少し余るのが普通で各中隊に分散してしまふとのことであった。

軍医殿より診断の結果「不合格」を宣言されると、床に手をつけて「軍医殿、私を是非入隊させて下さい」と号泣する者。また、「私は昔、肋膜炎をしましたので軍務に耐えられないと思います」と、細々とした声で訴える者に軍医は「合格！」と宣言された。「昔、楠正成は、肺を患い血を吐きながら戦場におもむいた。お前は固まっていて心配ない」と、付け加えた。

私は、高級軍医殿の最終判定の指示通り種別のゴム印を押す任務であった。その報告書は各県、連隊区に送達される。不合格者でも、また召集が来る。召集日間に間に合わず、満州、大連あたりからの遅延入隊者も数多くあった。

戦況はますます逼迫し、合格の範囲も拡大され、四月に入り、召集者が、東海・北陸・関西・

四国・中国と、九州地方以外の令状が多くなり、基幹要員は九州人で、他の者は各地出身者で編成され、学校・寺・神社に集合し、一晚でどこことなく出発していなくなる。次の朝も営庭に溢れるほど召集兵でいっぱいである。

連日の大動員、二千人より三千人、四種混合ワクチンの予防注射、針が曲がりこれを直して煮沸消毒、医務室内は狭くて外庭に机を出して、各中隊の名簿を引き合わせて実施中に、年末一時帰休の同年兵が混じっていたが、我々は星が一つ増えて古兵殿である。白衣を着て大量の召集兵をてきぱき捌くのを見ていて溜息が聞こえた。でも、明日の命は誰にも判らない。召集の同年兵等は今夜は南方方面に出発である。

忙中閑ありでちよつと暇があれば班長殿の腰を揉み、巻脚絆を取り上げていた頃、私の話が中隊殿へ、更には部隊長殿へと伝えられたようであった。

部隊長殿よりのお呼び出し

一期の検閲前の頃、ある日、班長殿が「中島、部隊長殿がお呼びだぞ」「直ぐに本部へ行け」と言われ本部まで急ぎ行った。「衛生兵、中島富夫参りました」部隊長殿は「以前馬より落ちて腰が痛い、治るか」「ハイ、治るであります。寝台に伏臥して下さい」と、腰背部を触診して軽く按摩を施した。「できれば鍼治療したらよいと思います」部隊長殿のお顔を真っ直には見られない神様級の方の腰痛治療を頼まれて光栄である。鍼灸師の免許は本当に有り難く貴重な資格であった。

「では鍼をせよ」である。「鍼灸治療具を取りに佐賀へ行きます」と答え、公用腕章と外泊許可証が用意してあった。班内の古兵は勿論のこと中隊事務室の係官まで「中島物件は何か、単なる按摩のみでない。何かがある。あるいは部隊長殿の親類か」「鍼治療具を取りに参ります」。何回説明しても聞いてくれないが、個人的な制裁のゲンコツが班全体激滅した。

その後も部隊長室を再三訪問した。ある日、班長が私に静かに近づき「中島、今日もお部屋へ行くか、今直ぐ行け」とのこと、今日部隊長殿は出張不在を私は知っていたが、班長殿の声が、何かあると、サッと班を出て便所に一時間以上も入っていた。

やっと臭い所から解放され内務班に戻ったら、嵐の跡であった。古兵一同から、初年兵全員往復ビンタの後は、手箱、整頓棚は木銃でひっくり返され、班全員、沈黙の真っ只中の時、「只今、中島帰りました」シーンとしている。腫れ上がった顔を部隊長殿に見られては内務班の恥、気合を入れるのに内務班のしきりであるが、班長殿の私に対する思いやりであったと感じた。部隊の規則には「私的制裁の禁止」と大書きされているだけである。

何回も部隊長室に出入りするうち雑談をされるので御返事申し上げていた。私は念願の心中に秘めていた「特攻志願」を申し出た。部隊長殿は、

少し顔をゆるめて「お前が一人で戦局が急に好転するものではないが、よく考えておく」と重要な言葉を頂いた。

入営する時から、国のためなら一身を捧げたいと思っていた。一期の検閲頃に希望任地調べがあり、満州・北支・中支・南支・南方の五地域を示され、中支と南方を希望した。衛生兵は中隊付が二人であり、全域の各地に分散勤務する。満州要員として渡満する者、各々召集部隊の隊付として三々五々任務につく。防疫給水班要員として任地不明、地方で開業の病医院の先生方も大動員に応募入隊され各部隊に配属される。

昭和二十年三月初め、陸軍衛生一等兵に進級した。精勤章が左腕に一本輝いていた。その直後に中隊事務室より緊急呼出しを受け、近衛歩兵連隊要員とのことであつたので、直ちに戦地希望を何回も申し上げ辞退した。係の方は「直接天皇を守る近衛兵だ、村に一人か二人の名誉の選抜である

ぞ」と、親切なご説明であったが、部隊長殿に特攻志願を申し出ている旨を申し上げて事務室を出た。

間もなく、同年兵の森勲君が呼び出され一発快答「中島、俺が行くぞ」と、三月八日出発も決定し、森君の母親が面会に来訪され、私も白い握り飯を頂いた。

三月十日陸軍記念日、東京到着の深夜、東京大空襲があり、森君は紅蓮の炎の中をやっと脱出、消火作業と救出にあたったそうである。久しぶり有田より便が来、急ぎ開封ももどかし読んで驚いた。父松次に召集令状が来て、唐津港まで家族で見送り、現在は朝鮮木浦付近に勤務中であるとの内容である。我が有田町で、親子軍隊に行った家は、他に一軒あると書いてある。何もない我が家から親子二人とも戦争の先頭に立ち、残っている母と小さい弟妹のことが心配になってきた。未曾有の国難であり、あとは死力を尽くすのみと、

奥歯を噛み締めながら、敵愾心益々旺盛となる。

部隊本部も若干の留守要員を残して大部分は山中に構築中の仮兵舎に移り、本土決戦に備えて防空壕掘りが毎日であった。釘・トタン・材料、岩を掘るノミ等、道具・材料の収集のため、外泊許可を与えられ、民間より材料、資材集め、早く堅固な陣地を完成したい。

一方、食糧自給のため、演習場、射撃場、国原地、河川敷どこでも開墾し、農家出身者は甘藷苗床作り、我々は「種イモ証明書」持参して各農家にお願ひして集めて廻った。

国を挙げて国難にあたる大動員の毎日で、三月中旬頃より続々大量の召集兵は宮庭を埋め、第二国民兵、兵役義務ぎりぎりの四十五歳、中学生（五年生）、入院中の患者その他で、列車の切符も入手困難、大阪より夜行列車で来たという召集兵は肩より一升瓶を袋に入れて、雑のうは炒大豆を入れていた。ふと見上げた桜、今年は花も咲かないのではと思つて見ると、一、二、三の蕾が咲きか

け、我々を激励しているが如く見えた。「撃ちてしまん、鬼畜米英」、全員が敵愾心に燃えていた。

いよいよ、内地各地の大空襲が始まるのであり、私は、特攻志願も認められたか否かを思い、一日も早く戦場への出動を待ち望んでいた。しかし、内地の空襲は激しくなり、本土防衛が緊急の大事となり、内外地の区別も無くなって来るのである。これからが、文字通り、戦地外戦務となるのである。

(一) 終わり・続く

私の人生記録

としての軍隊とは

岐阜県 堂前寅次

若い時の苦労は買ってでもせよ、と言われましたが、昔の人はいいことを遺してくれたものだ

と、年をとった今、つくづく思い返しています。

その私の歩んできた道の中での苦労と言えば、軍隊生活が、一番先に頭に浮かんで来ます。そこで、この軍隊の思い出を、作家でもない一市井人の私が、苦労の体験の一部を記録してみようと思つたのは、四十歳を遙かに過ぎてからでありました。

私は、大正五(一九一六)年、岐阜県の旧家に生まれ、昭和六(一九三一)年、学校を卒業しましたが、田舎の農家では現金収入の道はなく、鉄道工事、土木工事の手伝いなどし、トンネル工事終了まで、一年余りを無事に務め、一カ月の給料十五円をもって、母に渡したら、涙を流して喜んでくれ、早速、袋のまま神棚にお供えしてから「有難う、このお金で、お前の『銘仙の着物』を作るんだ」と、涙を流して喜んでくれました。この時、今まで、父母を何とも思っていなかったし、ただ空気のようなもので、当り前のようになんとも気なく考えていましたのに、こんなことで喜んで